シリーズ人権教育　第１５３回

中学生人権作文

コンテスト受賞作品



１２月１３日（土）開催「人権・子育てフェスタ」で表彰された、第３４回全国中学生人権作文コンテスト（法務省、全国人権擁護委員連合会主催）東広島・竹原地区大会優秀賞受賞作品の中から一作品をご紹介します。



それぞれの個性

　　　武田中学校二年

宮永 康太郎

　「人」にはそれぞれの個性がある。その個性があるからこそ、この世界は成り立っていると僕は思っている。しかしその個性をバカにしたりからかって人の心を傷つける痛い思いを僕は経験した。

　僕は私立中学へ一人で入学した。知り合いは誰一人居ない、でも自分がこの学校で勉強したいという思いを胸に入学した。しかし不安はあった。その不安と共に嫌な思いをしだした。僕の髪はかたい髪質で、少しのびると前髪はピンと立ち、横は広がる。僕はこの髪質があまり好きではなかった。他の人のようにやわらかいさらっとした髪になりたかった。その髪を見て、一つ上の先輩が「よ！　ス・ネ・オ君」と笑いながら髪をさわってきた。周りの人はみんな僕を見ながらクスクス笑う、誰一人助けてはくれなかった。僕は嫌な気持ちになったが、知らない先輩に言い返すと何

をされるかわからない。だから腹が立つけど我慢した。それからいつも会うたびに嫌な事を言われる、遠くにいても目が合うと笑われたりされた。だから、いつのまにか、僕の髪を他の友達もからかうようになっていた。僕の心はなんでこんな学校へ来たんだろう、入学するんじゃなかった。小学校の友達がいる公立中学へ戻りたい、そう思った。

　でも自分が選んだ道だと思い、言われても気にしない！　と心に決めて一年間を過ごしたがだんだんと「ス・ネ・オ」という言葉につらい思いと髪をさわられる行動に限界がきていた。まただまっていると「おい！　無視すんな」という声。色々な事が僕自身、自分を嫌いにならされた。家に帰っても母が声をかけても「ボーッ」とした姿、勉強も手につかず、時には急に怒りだす。その姿に母は声をかけてきた。僕は今まであった事を話した。涙が出た。

　でも話をして少し気持ちが軽くなった。母は、「こんなに悩んでいたことに気づいて

あげれないでごめんね。かたい髪質で生んでごめんね。」と母も涙を流した。でもその

時に母が言った言葉がある。人に嫌な事を言われてつらい思いをした嫌でつらい言葉は絶対に他の人に言ったりしたらいけないよ、その事はよくわかったよね、自分のつらい思いを人にさせたらいけないよと。

　母との会話を終えてから僕の気持ちは変わった。この髪のどこがおかしいんだろう、僕は僕なんだ。人は色々な所が人とは違う。みんながすべて同じだったらどうなんだ。そのほうがおかしい。そう思うようになった。そして学校の先生にも僕の気持ちを伝え、先輩、友達にもわかってもらえた。

　その時はすごくうれしかった。相手に気持ちを伝える事は、本当に難しい。でも伝えなくては伝わらない。しかしその前に相手の気持ちを考えて言葉にしなくてはいけない。僕も時々、自分の気持ちのままに相手に発言をしてしまうことがある。その発言ひとつで相手の心を傷つけてしまう事がある。気をつけなくてはいけない事がよく分かった。個性をすばらしいととれるような心をもつ。何が正しいのかそれが相手にとって本当にいい事なのか、人に流されず強い心を持っていきたい。また自分を愛す。人も愛す。そういう気持ちをつねに持ち大

きく成長していきたいと思う。

